



7月号 表紙の顔

浅田 梨奈

RINA ASADA

あさだ・りな / 1990年10月30日、長野県生まれ。163cm、右投げ。2015年プロ入り（48期／ライセンスNo528）。スターレーン所属。昨年度ポイントランキング7位。

(Photo/馬場高志)

## 「ブロンズメダルコレクターの返上を…」

今ノンタイトルの女子プロでは、最も優勝に近い位置にいるといっても過言ではないだろう。48期といえば、デビューイヤーに全日本選手権を制した山田幸をはじめ、久保田彩花、宇山侑花、内藤真裕実と、すでに4人のタイトルホルダーを輩出している豊作の期だ。

「すごく刺激になっています。同期が頑張っているから、私も同じステージに立ちたい、優勝したいという気持ちがより大きくなっています。もちろん先を越された悔しさは、めちゃくちゃあります(笑)」

幼いころ、ボウリングが趣味だった両親に連れられて行ったボウリング場が遊び場だった。

「小学校4年生ぐらいのときに母親から、地元の新聞社が主催している“親子ボウリング大会に参加してみない?”といわれて出たけど、全然ダメでした。表彰台に登っている子を見たら、全員がジュニアクラブに入っている子だった。ああジュニアクラブに通わないとうまくなれないんだと思ったのが、競技として始めるきっかけでした」

その後何度か、ボウリングと縁が切れてもおかしくない状況が訪れたが、そのたびに運命のように、ボウリングの世界に引き戻された。

2015年にプロ入りすると、当初はプロの水にアジャストするのにややてこずったが、4年目の昨年は、全試合で予選を通過、4試合で5位以内に入り、ランキングは7位へジャンプアップした。

「一昨年から1年間、パーソナルトレーナーの方についていただいて、体の使い方などを教わってきました。またハイスポーツさんとボール契約をさせていただいてから、ボールの講義もそうですが、練習会にも参加させていただいて、コーチングの資格を持つ先輩プロの方にアドバイスをいただく、それを帰って練習して…という繰り返しなかで、ボウリングがすごく楽しくなってきた。それらがうまく成績につながってきたのかなと思います」

今シーズンも、KUWATA CUPとグリコセブンティーンアイス杯で3位など、タイトルへあと一歩と迫っている。とこ

ろで過去の成績を調べていて、中学3年時の全日本中学選手権を皮切りに、高校選手権、大学個人選手権のほか、国体でも少年女子、成年女子など、3位という成績が多いのが目につく。

「アマチュア時代は3位まではメダルがもらえるので、ブロンズメダルコレクターってよくいわれていました(笑)。プロでもそうならないように、まずは次のステップ、優勝決定戦に行きたいです。そうでなければ優勝のチャンスもないですから」(取材協力・立川スターレーン)



▲いろいろなことに積極的にチャレンジ。最近バックスイングからリリースにかけての左腕の使い方を変えた

## FOCUS UP

## デビュー2年目でJPBA承認大会を主催。鈴木馨プロって何者だ!?

プロ2年目。目下のところ公式トーナメントでの実績は皆無なのに、ユニフォームには「日本生命」「JVCKENWOOD」といった名だたるスポンサーのワッペンが多数貼り付けられている。今年1月には所属先の㈱ウェブアイを、4月には自身が代表取締役を務める株式会社BELLを主催者に2度のJPBA承認大会を実現させた。鈴木馨プロって、いったい何者!?

## 高学歴のスポーツウーマン

先日行われた下半期順位決定戦(6月4日、稲沢グランドボウル)は161人中の159位。「今の実力はプロの底辺」と自ら断じて苦笑する鈴木プロだが、一方で彼女には他のプロボウラーにはない異色かつ豊富な社会人経験がある。

驚くなかれ、最終学歴は東北大学大学院医学系研究科博士前期課程修了(障害科学修士)。修了後は岩手、宮城の地方公務員となり、各地域の特別支援学級に派遣されて10年近く教鞭を執った。ボウリングとの出会いはその当時、仙台の特別支援学級時代のことだという。

「学内に『マイボウラーの会』という先生方のサークルがあって、誘われて月2、3回の練習会にハウスボールで参加していたんです。でもゲームで負けっ放しなのが悔しくて、一人でこっそり練習に行ったら、センターの方が『ハウスボールじゃ勝てないですよ』って(笑)」

かくしてマイボールを手にし

た彼女は、1年後には国体の宮城県代表に選出されるまでに腕を上げる(東北ブロック予選敗退で本大会出場はならず)。その翌年にはプロテスト受験を決意したが、折悪く東日本大震災が勃発。同年、大学の誘いを受けて公務員職を辞し、救命救急士科と言語聴覚士科で非常勤講師を務めながらプロテスト挑戦の機会を窺った。

もとより理系のガリ勉女子というわけではない。小学校時代に習い事で始めた競技ダンスは大学院まで続け、部活でバスケットボールに勤しむ傍ら、陸上競技会にも駆り出されていたというスポーツウーマンなのだ。

高校時代は「バスケより成績がよかった」陸上競技にシフト。地肩の強さを生かして投てき競技(やり投げ、円盤投げ)に打ち込み、年1回は七種競技にも挑んだ。さらに大学・大学院時代には仙台発祥の「格闘空手」大道塾で5年間総合格闘技を学んだというから驚く。



▲所属先の一つであるプロショップナカライ×ラウンドワン南砂店には週5日勤務。同センターで本戦が開催されるROUND1グランドチャンピオンシップには「何としても出場したい」と予選会突破に燃えている

## 相次ぐ苦難にも心折れず

そんな彼女もプロテストを突破するまでには丸7年、計5回のチャレンジを要した。最初の2回(2013&15年)は1次の2日目で撃沈。この間重症のヘルニアを患い、3度の手術を含む長期療養生活を余儀なくされている。

普通の人間ならそこで心折れそうなものだが、生来負けず嫌いの彼女がプロ入りを諦めることはなく、リハビリを兼ねて「10ポンドのボールから」コツコツと練習を積んだ。12ポンドが投げられるようになった頃には日本でPBAリージョナルツアーがスタートし、「どうしても第1回大会に出たかった」とJB Pの関係者に頼み込んでアマチュアの予選会にエントリーしたという。

16年、3度目の挑戦でついに

1次突破もそこまで。1次免除で臨んだ翌17年に合格を期したが、イージーミス連発で自滅してしまう。

「初日に後ろで見ていたファンの人が数えていて、同じボックスで投げていた霜出(佳奈。同年のトップ合格)さんとストライクの数と同じだったのに、私はイージーミスが31回あったそうです(苦笑)」

それでも1次から仕切り直しとなった翌18年に大願成就。ときに鈴木プロ42歳。あっぱれと言うしかない。

こうしてみると、現在鈴木プロをスポンサードしている企業は、彼女の高学歴と堅実な社会人経験、プロボウラーとなるまでの真摯な努力のプロセスを信用・信頼の担保としているのだと推察される。だが、本人は決

してそうした現状に甘んじるつもりはない。

「スポーツ医学を学んできた観点から、今のままでもジュニアやシニアの指導はできますが、プロとして成績が伴わなければ説得力はないし、スポンサーにも申し訳ないですからね(苦笑)。コンスタントに試合に出て、決勝ラウンドロビンに残るぐらいまでは腕を上げていきたい。マイボールでボウリングを始めて11年ですが、正味のキャリアは6年。伸びしろはまだMAXあると思っていますから(笑)」



すずき・かおる / 1976年4月27日、岩手県生まれ。162cm、右投げ。2018年プロ入り(51期／ライセンスNo576)。株式会社BELL代表取締役社長。㈱ウェブアイ／プロショップナカライ×ラウンドワン南砂店所属。